
M e s s e n g e r

なく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e s s e n g e r

【Nコード】

N 3 6 2 7 A

【作者名】

なく

【あらすじ】

自殺を考えた少年を救ったのは、言葉の力を使う不思議な男だった。

第一話

「・・・そうだね・・・君の飼っている犬が残るんじゃないのかな？」

吹きさらしの風が吹く中、髪を後ろで結んだ、長身の男はそう言った。

「・・・は？」

少年は思いっきり間拔けな声を出した。

無理もない。初対面で、しかも今から屋上から飛び降りようとしている時に、いきなり現れた見ず知らずの男に、突然そんなことを言われたら、誰だって似たような反応をするだろう。

今まさにフェンスに手を掛けていた少年は、とりあえずそこから降りた。

訝しげな顔で男を見ている少年を気にもせず、男は更に意味不明なことを言う。

「おや？君の家は犬を飼っていないのかい？」

「飼ってませんよ・・・別に何処の家だって飼ってるわけじゃないでしょう」

“飼っていない”と言った途端に男が驚いた表情をしたので、フォーのような言葉を付け足した。

「だって君は犬飼くんだろう？」

素っ頓狂なことをいう男に、少年はややげんなりとした。

「名字が犬飼だからって、犬を飼ってるとは限らないでしょう・・・猫なら飼ってましたけどね」

「君は飼ってないのか・・・騙された・・・」

くっ・・・！と不覚そうに眉間に手を当てている男を見て、少年は半ば呆れて溜息をついた。

「誰も騙してないでしょう」

「いや」

男は少年の言葉を否定した。その時の声は、今までのようなふざけている様にしか聞こえないものとは違い、やや真剣だった。

「僕は騙されたのさ。君の『犬飼』という名字に」

「・・・はあ？」

「犬飼という名字・・・というよりもその個人を指すのに犬飼という言葉を使っているのだから、犬を飼っているのだろうと思うのは当然のことだ。そうだな・・・それは、騎手が馬に乗るのは当然、というのと同じこと」

意味の解らないことを語りだす男に、少年は困惑した。

「まあ、君が犬を飼っていないというのだから仕方あるまい・・・
それで、だ」

男は少年にやや近付いてきた。

「君の質問に応えよう」

「？俺、質問なんてしてないですけど・・・」

目の前の男が何を言っているのか解らなかった。むしろ会話として全く成立していない。少年は男に何も訊いていないし、それどころか男に対して少年から何も話し掛けていない。少年は実は言葉が通じていないのかと思った。

「君は確かに『口に出しては』何も言っていない。でもね、君の心が、ずっと訊ねているんだよ。『生きてて残るものは何だろう』 -
ってね」

「！？」

少年は驚愕した。

それは確かに、少年がずっと思っていたことで、その疑問が少年を飛び降りる一歩寸前にまで連れてきたのだ。

「どうして・・・」

眼を見開いている少年に、男は更に近付いていった。

「たとえ声に出さなくても、それが『言葉』としてあるならば、僕には聞こえる・・・君がずっと思っていたことが、言葉になって聞こえてきたんだ」

男は軽く少年の胸を突付いた。

「君の質問に応えよう・・・何が残るのか・・・」

男は真っ直ぐに少年の眼を見つめてきた。

少年は金縛りにでもあったかのように、動けなかった。

「君が紡いできた言葉、君が紡がれてきた言葉」

男はそこで一度言葉を切った。

「それが、残る」

「・・・言葉が、・・・残る・・・？」

少年は、上手く言葉が発せず、男が言ったことを反芻した。

「言葉には力がある。言葉は時に人を傷つけ、時に人を癒す。たった一つの言葉に救われたり、たった一つの言葉に殺されたりする。君が今まで出会ってきた言葉の中にも、そういう言葉があったかもしれない。そういう言葉が、残る。君が紡いできた言葉の中には、他人に影響を与えた言葉があったかもしれないし、これから君が紡いでいく言葉の中に、そういう言葉があるかもしれない。そうした言葉たちは、誰かに紡がれたことによって、人に連鎖し、世界を動かしていく。だから、生きていて、言葉が、残るよ」

「・・・・・・・・」

それは何処か哲学的な、言語学的な、よく解らない説明だった。
でも何故かそれを納得してしまうような、そんな力が、この男の言葉にはあった。

「さて、質問には応えたよ。君は帰らないのかい？」

男は到底自殺しようとしている人間に訊くものではない台詞を唐突に述べる。

「何で、そんなこと訊く・・・・」

「君は死にたがっていないだろう」

唯一の疑問は遮られた。

「僕は本当に死にたいと叫んでいる人のところには来ないよ。君は『生きてて何が残るんだ』って叫んだから、それに応えに来ただけさ」

「な・・・・」

あんたは一体何なんだ、と言おうとして、また遮られる。

「しかし犬飼くん、君はやっぱ犬を飼った方がいいんじゃないかな。猫ももういないんなら問題ないだろう？」

「何でまたその話に戻るんですか」

「だってー・・・君はまだ少し納得していないようだから。何も残らないと思っているなら、何かが残るようにしてみたらどうかかなと思ってる」

そう言いながら男は伸びをして、少年に背を向けた。
どうやらそのまま去っていつてしまうようだ。

少年は慌てて声をかけた。

「ちょっと待て、あんたは一体何なんだ?!」

その問いに男は振り向かなかったが、微かに笑った気がした。

「何かが気になるということは世界に目を向けたということ・・・
いい傾向だね」

「あ・・・?」

言葉の意味が解らずに、少年はしばしぼかんとした。
その間にも男は下へ続く階段のドアの所までたどり着いていた。

「君が僕のことを知りたいのなら、きつと近い内にまた会おうだろう。
その時にまた、君の質問に応えよう」

そう言い残して、男は階段を降りていった。

少年はただその場に立ち尽くしていた。

（雨か・・・）

少年は帰路についていた。

先ほどまで本気で飛び降りようと思っていたのだが、あの男に会ってその気をすっかり殺がれてしまった。

帰り道は、雨が降っていた。

傘を差しながら歩いていると、道の脇に小さなダンボールが見える。捨て犬だ、と解った時、少年は無意識にそのダンボールの中の小さな犬を抱き上げていた。

飼わなければいけない気がした。それは何故なのか、解らなかったけれど。

動物が余り好きでない父は、酔っ払っていて飼うことを許してくれなかった。母は動物が好きなので問題ない。

まるで御都合主義の漫画のように、犬を飼うことが決まった。

その犬の名前を考えようと思ったとき、ふと屋上で出逢った男のことを思い出した。

“何も残らないと思っているなら、何かが残るようにしてみたらどうかな”

「・・・ノコル、にしよう」

「なあに？その犬の名前？」

「・・・うん」

『ノコル』と名付けられた犬は少年に懐いたようで、与えられたドックフードを食べ終えた後、少年に擦り寄ってきた。

飛び降りようと思っていた少年の自殺願望は、雨に洗い流されたかのように、すっかり無くなっていた。

あの男は何だったのだろうかと思つて、きつとまた近い内に会えたらこの犬のことを言いたい。言つたら、どんなことを言つのだろうかという男の言葉を思い出した。

会つたらこの犬のことを言いたい。言つたら、どんなことを言つのだろうか。

もう、あの男が何処の誰であつても、そんなことは関係ないような気がした。

「おい、犬飼。先輩が呼んでるぞ」

「ん？ああ、ありがとう」

次の日はとてもいい天気で、すがすがしい一日が過ぎた。
HRも終わった頃、クラスメイトに言われて、廊下に出る。

「今日当番の子がお休みで、悪いんだけど、代わりに図書当番やつ

て貰えないかしら？」

図書委員の先輩が、困ったように頼んでくる。

犬のことも気になったが、困っているようなので引き受けた。

図書室は一番上の4階にある。

校庭に面して建てられているので、放課後になると西日が眩しい。

図書委員といっても当番は一ヶ月交代なので、図書室にくるのは久しぶりだ。

特に変わったことはないかと見渡してみると、一番奥の机の配置が変わっていた。

案内板を見ると、「カウンセリング」と書いてある。どうやら、相談コーナーのようなものが設けられたらしい。

そういうものが出来たのを全く知らなかった少年は、興味本位に足を運んだ。

そこにいたのは、髪を後ろで結んだ、座ってはいるが立つたらおそろく長身の、かなり見覚えのある……

「あ、あんた……」

「やあ、また会ったね。犬飼くん」

こちらを向いて笑いかけてきたその男は、まさに昨日少年の命を救った、あの男なのだった。

第二話

「須堂道臣 昨日からここに配属になった、平たく言えば青春に悩む若者達の心を慰めようとする心優しい職業の人だ・・・ちなみにボランティアじゃなくて、ちゃんと給料は貰っているよ」

「・・・は？」

挨拶をするや否や、男は突然自己紹介をし出したので、少年はまたぼかんとして男を見る。

「君が言っただろう？あんたは一体何なんだって」

「あ・・・」

昨日の放課後、自分が言った台詞を反芻されて、ようやく理解する。

この男はまた自分のした質問に応えているのだ。
唐突過ぎて、適当過ぎるが、確かに。

「それで？君は何も教えてくれないのかな？」

じいっと、上目遣いに見てくる顔は、笑っている。
少年は慌てて答えた。

「あ、お、俺は、犬飼隆弘。ここの生徒で、2年A組。図書委員」

「なるほどねー・・・君が此処に来たのはその為かー」

ふむふむ、と男―須堂は頷きながら言った。
その言葉の真意は、相変わらず掴めない。

「君は何か僕に言うことがあるのかな？」

「え・・・」

またもや唐突に訊かれる。この男は、もうちょっと解りやすくモノを言うことが出来ないものか。

「何か言うことがあるから、僕を見つけたんじゃないのかな？」

そう言われて初めて、拾った犬のことを思い出す。

『ノコル』と名付けた犬のことを話すと、須堂は愉快そうに笑った。

「分かりやすい名前だねえ．．．しかし、『ノコル』か．．．」

最後の方の言葉にやや影が差していたので、犬飼は気に止めた。

「？何かあるんですか」

「いや、別に何でも。それより、用が終わったんなら、仕事に戻った方がいいんじゃないかなあー」

後ろを指差されて振り向くと、そこからカウンターが見えた。

「あっ．．．！」

空のカウンターに、並んで待っている列が出来ていた。

本を借りようとしている人達が、受付待ちをしているのだ。

「いつけね．．．！」

少年犬飼は慌ててカウンターへと向かった。

途中、振り向いて

「何時もここにいるんですか？！」

と、やや怒鳴るようにして訊いた。

「月・水・金はいるよ。火・木はお休み」

須堂はこちらに手を振りながら言った。

犬飼は微かに頷いて、カウンターへと入っていった。

須堂は少年が受付を始めたのを視界に入れて、ぽつりと呟いた。

「『ノコル』ね、・・・『君』から、『残される』ものにならない
といいね・・・」

謎めいたその言葉は、しかし、誰の耳にも入らなかった。

「ふう・・・」

とりあえず並んでいた人たちの受付は終わった。

後の人たちは、座って本を読んだり、何かを探してたりする。

誰かが本を借りようとここに来なければ、カウンターに座ってるのはひたすら暇なだけだ。

犬飼は溜息をついて、ふと奥の方の一角を見た。

そこには、先ほど須堂と名乗った男が、生徒と話している。

（カウンセリングに来る人・・・いるんだあ・・・）

犬飼は今まで半信半疑だったので、そこでようやくあの男が本当に
カウンセリングとしてここで働いているという事実を認めた。

（・・・あれ・・・？あの人・・・）

須堂と向き合うようにして座っているのは、女生徒だった。

その女生徒に、犬飼は見覚えがあるような気がした。

（あの人って・・・確か3年で・・・歌姫って言われてる人じゃないか？）

犬飼は、3年生に天才的な歌唱力を持つという女生徒がいることを思い出した。

（その人は、確か―・・・）

横嶋美咲

「それが君の名前かい？」

「はい・・・」

犬飼が見つめるその場所では、今まさにカウンセリングが始まった所だった。

「それで、君の悩みは何かな？」

「・・・」

顔の両側に長い三つ編みを垂らし、やや俯きがちな少女―横嶋美咲は、黙り込んでいる。

「君は確か、歌が上手いんだったねー・・・今度のコンクールにも出るそうじゃないか」

“コンクール”という言葉に、膝の上で握っていた手が反応した。須堂はそれに気付いているのかいないのか、言葉が続けた。

「君の悩みは何か？言ってくれないと、解らないんだけどー」

再び繰り返された言葉に、少女はやっと口を開く。

「・・・自信が・・・ないんです・・・」

周りには誰もいないその空間で、遮る音はないはずの場所で呟かれたその言葉は、うっかり聞き落としそうなほど小さかった。

「・・・母や、先生が・・・金賞をとれていたんですけど・・・皆にも、とれるっていわれるんですけど・・・自信がないんです・・・」

「それで、上手く歌えなくなっちゃったとー」

「！」

さも当然のような男の言葉に、少女は驚いた。そのことを何故、昨日来たばかりのこの男が知っているのだろうか。

「そう、昨日来たばかりだ」

男は突然そう言った。

「昨日僕は、校舎を歩き回ったんだよ。その時、合唱部の子達の話

を聞いた。君は、最近調子が上手く出ないと」

「・・・・・・・・はい」

「どうして、自信がないのかな？」

男は、まるで保父さんが園児に話しかけるような口調で訊いた。

「だって、金賞なんて、あの大会は、音大の附属のところから来る人もいるのに・・・・・・・・」

「金賞をとれる自信がない、と・・・・・・・・それは、君にとって大事なのかな？」

「え・・・・・・・・？」

「君の目的は、金賞をとることなのかな？」

男は、真っ直ぐに少女を見つめた。その瞳は穏やかなのに、何故か、心の底まで見透かされているような気がした。

「だって、とれたら、とれた方がいいですし・・・・・・・・」

「じゃあ、とりなよ」

「そんな・・・・・・・・」

誰にでもとれるかのように軽く言い放つ男に、少女はやや反論した。それでもその言葉は、遮られた。

「賞というのは、参加者の誰かに与えられるものだ」

「……でも……」

「その誰かが君でも、不思議じゃない」

「……とれません、金賞なんて……」

与えられる言葉に、少女は首を振った。

賞をとることの難しさを、幼い頃から何度も経験してきた少女は知っているのだ。

「出来ないって思ってることは、何時まで経っても出来ない」

男は相変わらず少女を見つめているが、少女は相変わらず俯いていて、目が合うことはない。

「でもね、君がそれでいいんなら、出来ないままだっていいんだよ」

「！」

その言葉に、少女は弾かれるように顔を上げた。

必然的に、男と目が合う。

「出来ない、自信がない……だからしない。そうしていることっていうのは、君が一番に思い描いている『したいこと』とは違う。本当にしたいことならば、どんな条件がついていても君はしようとするはずだ」

男は、一度少女から視線を逸らし、再び合わせる。

「出来なくていいことはなくてもいい。他に君がやりたいことがあるのだから」

「やりたい・・・こと・・・」

少女はややたじろいだ。半ば呆然としているように、言葉を反芻した。

「君はどうして、歌うんだい？」

「え・・・」

突然質問されて、少女は瞬時に切り返せない。

「大会のため？賞を取るため？親のため？先生のため？」

「・・・違う・・・」

少女はふるふると首を振った。その顔は再び俯いている。

「じゃあ、どうしてだい？」

「歌いたい・・・から・・・」

「それはどうして？」

男は肘をついて、組んだ手の上に顎を乗せていた。

「好きだから・・・歌つてると、楽しいから・・・」

「なら、それでいいんじゃないかい？」

「え・・・」

少女は、今度は虚ろな表情で顔を上げた。
その瞳には男の穏やかな微笑が映っていた。

「君がやりたいことをやるといいよ。やれることをやるといい・・・
ただ」

男はそこで一度言葉を切った。

「出来ないと思っっていることは何時まで経っても出来ない。何かを
成し遂げるというのは、心のどこかでその可能性を信じているから
だ。・・・君にとってはとってもとれなくてもいいような賞なら、
とれると思っってみても、別に罰はあたらないんじゃないかな？」

「・・・」

「どう？」

「・・・とれたら、いいなと思います」

「もう一声」

「・・・とります。・・・とれると、思います」

「うん。きつととれるよ」

「はい」

少女は俯いていた顔を上げて、席を立った。歩き出した少女に、男は声をかけた。

「自分の好きなように歌っておいで」

少女は振り向いて・・・微笑った。

「はい」

少女が遠くなり、カウンターに差し掛かった頃。男は愉快そうに口の端を上げた。

「・・・出来ないと思っていることは、何時まで経っても出来ない・・・でもね、」

その表情と裏腹に何処か暗い呟きは、誰も聞いていない。

「出来ないと思っているのも、“シアワセ”の1つかもしれないね
！・・・」

その言葉に被さるように、時計が鳴った。五時になったのだ。

「あ、仕事終わりー。帰ろうっと」

先ほどとは打って変わって呑気な声を出した須堂は、上着を持って席を立った。

そしてそのまま、出入り口へと歩いていく。

「出来ないと思って出来ないのと、出来ると思って出来ないのたのは、一体どっちが……」

歩きながら囁くようなその言葉は、ドアを閉める音に掻き消された。

カウンターに来る前にある教員用の出入り口から出て行った須堂の言葉は、受付中だった犬飼には届かなかった。

第三話

カタン

「ん？」

下駄箱に、何かが入っていたようだ。

登校してきた犬飼は、開けた途端に落ちた白い紙を拾い上げた。

「犬飼隆弘さま・・・俺宛？」

とりあえず教室に行ってから読もうと、犬飼はその手紙らしきものを鞆に入れた。

中庭には穏やかな風が吹いていた。小春日和とでもいうのか、気候はぽかぽかと暖かい。思わず眠くなってしまうほどに。

しかし、そんな雰囲気には似合わないような、真剣な顔をしてそこに立っている少年がいた。

名は知つての通り犬飼隆弘。

彼は右手に今朝下駄箱に入っていた手紙を握り締めていた。

内容は『昼休みに中庭で待ってます』的なことがもつと乙女チックに書かれているだけである。

生まれて初めてそんな手紙を貰った犬飼は、正直動揺していた。

下駄箱に入っていた手紙。それに貼られたハート型のシール。誰もいない中庭への呼び出し。

ここまでお膳立てされれば誰にだって解る。ラブレターである。

もしくはそう装った脅迫状かただのからかいの手紙・・・というのはすっかり舞い上がってしまったっている犬飼には思いつかなかった。

(・・・一体、誰が・・・)

まさに、こういう時に使うべきなのであろう効果音を使ってみる。

犬飼はドキドキしていた。
犬飼はソワソワしていた。
犬飼はモジモジしていた。
犬飼はオロオロしていた。
犬飼は

「あ、あの・・・」

そろそろネタが尽きてきた頃に、1人の少女が現れた。

「手紙、読んでくれたんですね・・・」

長い柔らかそうな髪を風になびかせて歩み寄ってくる少女は、まさに少女漫画から出てきたような声で言った。

犬飼は呆然とした。夢を見ているのかと頼ったをつねろうとしたぐらいだ。少女が見ているのでやめたが。

「君は・・・」

「1年の皐月、由梨奈と申します・・・」

もじもじ、という感じで少女は答えた。何だかもう、見てることちが恥ずかしくなるような空気が流れていた。

「あ、あの、皐月さん・・・それで、用事って・・・」

「・・・私・・・先輩は覚えてないかもしれないんですけど、前に先輩に助けてもらったことがあって・・・ハンカチ、拾って貰ったんですけど・・・」

「あー・・・」

そういえば、ちょっと前にそんなことがあった気がする。
たまたますれ違った女生徒がハンカチを落としたので、拾って渡してあげたのだ。

（そういえば、この子かもー・・・）

「それで、あの・・・その時から、私ー・・・」

ざああ・・・と風が吹く。少女漫画ファンなら喜びそうなシチュエーションである。

「先輩のことが、好き、なんですー・・・」

もう風とか吹かしとく。どうにかしてこの文章全体から漏れでるピンク色の空気をどこかに押しのけたい。

「あ、あのっ、でもっ、返事とかっ、気にしないで下さいっ！言いかけただけですから、ーじゃ、私はこれでー・・・！」

「あ、・・・」

呼び止める間もなく走り去ってしまった少女の背中を、犬飼はぼーっと、夢見心地で見つめていた。

告白された。あんな可愛い子から。そのことが犬飼の頭を埋め尽くし、夢見心地に立たせていたのだ。

だが、そんな空気を打ち消すかのような出来事が起こる。

「言いたかっただけっていうのは、随分と自分勝手だねえ」

「!!!!!!」

いきなり頭上から降ってきた声に、犬飼は危うく心臓を止める所であつた。

「あの子は解っているのかな？その言葉は未来を絶つてしまふということを」

この声は一体何処から聞こえてくるのだろう、と犬飼は辺りを見回した。すぐ横の木の上に焦点が合った時、犬飼は呆然とした。

「あんた・・・そんな所で何やって・・・」

「ん？昼寝だよひ・る・ね。こんないい天気の日に眠らないなんて損だぞ、若者よ」

ひらり、と木の上に寝っ転がっていた人物が降りてきた。

こちらもお馴染み須堂道臣である。

「もしかして・・・今の・・・見て・・・」

恐る恐る、答えて欲しくないことを訊いてみる。

「ああ、勿論全部聞いてたよ」

犬飼は再び屋上に行こうかと思った。ちよっくら遺書でも書いて。

「なーに、青春してていいじゃないか」

けたけたと笑う目の前の男は、いい加減素っ頓狂なことをし過ぎだと犬飼は思った。無性に何処かに頭を打ち付けたい。

「さて、と。問題は君のほうだ」

「え？」

木の幹に頭を打ちつけようとしていた犬飼は、声をかけられて振り向いた。

「あの子は君の返事をー・・・君との未来を望んでいない。自らの言葉で断ち切ってしまったからね。しかし、君は言葉の鎖に縛られてしまったまま・・・」

以前屋上でやったことを繰り返すかのように、須堂は犬飼の胸の辺りを突いた。

「“好き”という言葉は、言われた対象の意識を強制的に自分に縛り付ける」

淡々とした口調で須堂は言う。

「何故ならば、人間は誰もが本能的に『愛されること』に飢えていて、それを埋めようと思っているから。誰かに好かれるというのは、それを満たすチャンスだ。だから、その言葉の力から逃げられる者はいない。・・・真心のこもった言葉なら、尚更だ。君は完全に囚われてしまっているね」

この男のいうことは、どうしてこんなにも難解で、詩的で、不可思議なのに、何故か納得させられてしまうのだろう。まるでそれが、本能からくる理解とでもいうかのよう。

犬飼は須堂の言葉に囚われているかのように、体を動かさなかった。

「まあ、よくあることだから、仕方ないといえば仕方ない・・・君もあの子も、『言いたかっただけ』という言葉のせいで、どこか満たされないままに終わってしまうだろうね。何せ、君はあの子にそれほど好意を持っていない」

「そんなことは・・・」

「もし本気で好きだと思えば、追いかけていったはずだ」

搾り出した反論は、他愛ないもののように否定される。何時ものことながら、この男に反論しても意味はないようだ。

「しかし、あの子が言ったのが君だったとはね・・・何だい？意外とプレイボーイなのかい？君は」

「んなわけないでしょーがっ！！・・・って、知ってるんですか？あの子を」

「ああ・・・一昨日、店に来たお客さんだー・・・」

「店・・・？」

キンコンカーンコン・・・

「あ、予鈴だ。君は授業に戻るといいよ」

「あんたはどうすんですか？」

「勿論・・・昼寝を再開するよ」

「またそこですかよ！」

「さっさと行きたまえ・・・少年老いやすく学成り難しっていうだろう？遅れて怒られても知らないよー」

そう言いつつ須堂は木に登っていた。

「あーもーっ！」

少年犬飼は走り出した。“店”という言葉が気にかかったが、訊いている暇はなかった。

（今日は、えっと・・・月曜日か・・・ん？一昨日って土曜日・・・休みの日は、どっかで働いてたりすんのかな・・・）

とりあえず今日の放課後にでも図書室に行つて、問いただしてみようと決め、犬飼は滑り込みセーフで教室の敷居をまたいだ。

「・・・言葉というのは、キャッチボールだ」

木の上の男は、何かに語りかけるように言葉を紡ぐ。
しかしその言葉は風に流れていくだけで、誰にも届かない。

「何かを言われるのが嫌なのなら、独り言にすればいい・・・誰かに向けて投げかけたら、ちゃんと応えを受け取らなくてはいけないよ」

ざああ・・・と、また風が吹いた。

「それが例え、己を傷つける言葉であつたとしても・・・ね」

何処か寂しげな響きをしたその言葉は、風が何処かへ運び去つた。

第四話

（ごめんなさい、ごめんなさい・・・）

何に向かって謝っているのか、わからなかった。それでも、謝り続けた。喉がかれて、声は掠れ、雨を飲んで、涙も出ない。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

「がくり、と膝をついていた体は前に倒れ、目の前に地面がある。そんなことは気にも留めず、謝り続ける。」

「ごめんなさ・・・ごめんな・・・ごめ・・・」

「君は、・・・何を謝りたいの？」

キンコンカーンコン・・・

放課後になり、犬飼は図書室へ向かった。入り口に来ると、入ってすぐの所で目的の人物が誰かと話をしていた。

（あれ、齋先生・・・？）

目的の人物―須堂と立って話しているのは、英語科主任の齋尋先生だった。話している、というより、何やら須堂が説明を受けているような感じである。

暫らくすると、話が終わったらしく、二人はお辞儀をして、須堂はこちらに、齋先生は奥へと別れた。

「おや、犬飼くん」

入り口を出た須堂は目の前に立っている少年を見つけて声をかけた。

「今日はどうしたんですか？カウンセリングは・・・」

須堂の格好がそのまま帰り支度だったので、犬飼は訊ねた。相手はちよつと苦笑を浮べて答えた。

「今日はお休み・・・というか、今週はお休み。僕が使ってるスペースで英語の補講をやるんだってさ」

「あー・・・夏休み前の３年生のやつか・・・」

「そうそれ」

去年も、3年生の為の補講が図書室で行われることがよくあった。
夏休み前に補講を行うこともよくあったし、特に英語は力を入れて
やっていた。

「まあそんな訳で今から帰るんだー」

じゃね、と片手を挙げて去ろうとした男を犬飼は捕まえた。

「ちょっと、聞きたいことがあるんですけどー・・・」

別にたいしたことでもないし、今日無理に訊きださなくてもいいこ
となのだが、来週にするには、少し遠すぎる気がした。

「犬飼くん、今から帰り？」

「え、あ、はい。そうですね」

「じゃあ、一緒に帰ろっか」

「え？車じゃないんですか」

というか方向とかあってるんだろうか。途中まで、ということか？

「僕は免許持っていないんで徒歩ですー。葉連はつらだからすぐ近くだしね
ー」

「えっ！！」

葉連は犬飼も住んでいるところであつた。まさかこんな奇妙な男が
自分の近くに住んでいたとは思わなかった。

「犬飼くんはー？」

「俺も葉連ですけど・・・」

「じゃあ結構長く話せるねー」

さあ帰ろう、というように須堂は歩き出した。犬飼も慌ててついて行く。

「で、訊きたいことって何かな？」

生徒と先生の下駄箱は違うので、玄関で一度別れて外でまた合流することになる。合流して歩き出した時、須堂が訊ねる。

「あ、昼休みの子のことなんですけど・・・」

「あの子がどうかしたのかな？」

可愛い子だったねえ、と少し意地悪そうな顔で笑っている須堂は、立ち上がると犬飼より頭一個分ほど背が高いので、見下ろすように犬飼を見る。

「あの子のこと、“店に来たお客さん”だって言っていましたよね」

「うん」

てくてくと正面玄関への道を歩く。校庭を突っ切るのが最短距離なのだが、サッカー部が練習しているので弧を描くようにその周りを歩く。

「お店をやってるんですか？」

「うんー．．まあ、お店というほどでもないけどねー」

須堂は微妙な顔をした。「どうなんだろうねー」と考えているような顔だ。

「何のお店なんですか？」

この質問に犬飼は“どうして自分はそんなことを訊くんだろう”と思った。確かに謎が多い男ではあるのだが、自分はこの男のことを気にし過ぎのような気がする。

「．．．言葉を売る店．．．」

ぼつり、と。

この男らしからぬ小さな声で、呟くようなその言葉に犬飼が男を見上げた時、横から第三者の声が割り込んだ。

「あつ！あんだ！」

「えっ？」

犬飼が驚いて声のした方を向くと、掃除のおばちゃんが須堂の方に歩いてきていた。

「あんだ、木の上で寝るなって言っただろう！また寝てたね？」

「えっ、おばちゃん、何でそれを．．．」

おばちゃんの迫力に須堂はやや怯んでいた。まるで珍しいものを見るかのように、犬飼はそれを眺めている。

「あたしをなめるんじゃないよっ！葉っぱがやたらと落ちるからやめてくれって言っただろう」

「ご、ごめんなさいー」

「謝ってすんだら警察はいらないよー！」

そう言いつつ手にしている簾を振り上げようとしているおばちゃんに、犬飼は恐怖を覚えた。

「逃げるぞ、犬飼くんー！」

「えっ、ちよっと・・・！」

須堂に手を引かれてその場から走り出す。後ろでおばちゃんが何か叫んでいるが、気にしている余裕はない。犬飼は途中で少し前を走っている男の顔を見た。その顔は・・・何処か悪戯に成功して、怒られる前に逃げている子供のような・・・楽しくて仕方がない、そんな顔だった。

校門をくぐって商店街のほうまで走り続けて、二人は走るのをやめた。

「はーっ・・・また怒られちゃったなー 来週会ったのが怖い・・・」

「あんだ、いつも木に登って怒られてんのか・・・？」

荒い息のまま少年は訊ねる。

「まーねー・・・だって校庭の木の上って寝心地最高だからさー」

しょうがないよねー、と男は笑った。犬飼は自分の中の須堂の認識に“ダメな大人”というレッテルを貼った。

「それで・・・何の話だっけ・・・？」

息が整ってきた頃に須堂に訊かれて、犬飼はしばし頭をめぐらせた。意識を数分前に戻し、思い出した。

「あ、そうだ。お店ってー・・・」

そう言いかけると、須堂は何処かを睨むように見ていた。睨む、というよりは、顔を顰めて難しい顔をしている、と言ったほうが適当かもしれない。

「・・・解っているのならー・・・」

そう呟いたかと思うと、須堂は見つめている方向に向かって歩き出した。犬飼は訳も解らずにあとを追う。

「ちょっと、どうしたんですか？」

「・・・声が、するんだ。“俺は嘘つきだ”って」

「・・・え？」

傍から見ると危ない人のような発言をした須堂が、足を止めたのはとある喫茶店の前だった。

見た目は普通の喫茶店のようだが、と犬飼が思っていると、須堂はすたすたと中へ入ってしまった。

「ちょっと、・・・」

「大丈夫、奢ってあげるから」

「そういう問題じゃない・・・」

犬飼の学校では帰り道に何処かへ寄るのは禁止されているのだが、このまま帰るわけにも行かないので、もうすでに「2名です」とか言って案内されている須堂の後に続いた。

座ったのは窓側の一番端に位置するテーブル。

斜め前に男が1人座っているだけで、この席から見えるのはその客だけだった。

須堂は、座ってからずっと、その男を見ていた。テーブルに肘を乗せ、手を重ねて顎を乗せていた。

「あの・・・」

「あの人だよ」

その男のことを訊ねようとした瞬間に言われたので、この人は本当に心が読めるんじゃないかと信じ込みそうになる。

人の心の声が聞こえるなんて、下手したら精神科行きだというのに、どうして自分はこの男に付き合ってしまったのだろう。

犬飼はぐるぐるとそんなことを考えつつ、須堂の見ている方向に目を向けた。

見ると、男は時計を気にしている。どうやら誰かと待ち合わせをしているようだ。コーヒーを啜りつつ、雑誌を読んでいた。

(・・・あれの何処が『嘘つき』・・・?)

暫らく見ていると、男の携帯が鳴った。電話が掛かってきたようだ。男は「もしもし」と返事をして、そのまま話し始めた。

「ああ、ああ・・・今？会社にいるよ。これから、上司と打ち合わせなんだよ。

ん？夕飯は先に食ってていいからさ。今日雨ふるって言うてたから、洗濯物はきちんと取り込んでおけよ」

(・・・恋人？との電話、かなあ・・・)

内容から推察するにはそうとしかとれないのだが。「洗濯物」とかが絡んでくる辺り、多分同棲しているのでは、とも思う。

「お待たせいたしました」

「あ、どうも・・・」

特に頼んだ覚えは無いのにコーヒーが運ばれてきた。多分、須堂が先に頼んだのだろう。

(いつの間に・・・)

何でもかんでも、行動に謎が多い人だとつくづく思ってた須堂を見ると、コーヒーを飲みながら、何だか難しい顔をしていた。

「・・・あの人が、何なんですか？」

電話をしている男に聞こえないように、声を潜めて訊ねると、須堂はこちらに一瞥くれて、また視線を男に戻した。

「・・・まあ、見てれば分かると思うよ」

そう言った声は、普段よりやや低く、珍しく真面目な響きだった。

「・・・ああ、ああ・・・分かってる。愛してるよ」

ピッ

(・・・うわぁ・・・)

今時の恋人って本当にこんな恥ずかしい台詞言っただ、とか新たな発見をしてしまった。むしろそんなことを盗み聞きしていることが酷く悪いことに感じられてきた。

(・・・見てれば分かるって・・・)

男は相変わらず雑誌を読みながらコーヒーを啜っている。犬飼は暇

なので自分なりに色々考えてみることにした。

(・・・別に变なところは無いと思うんだけどなー・・・)

強いて言えば、これから上司と打ち合わせ、って言う割には随分と軽装だ。まるで、これから何処かへ遊びに出かけでもするかのよう
な・・・

(！まさか)

「お待たせ」

「おっせーよ」

犬飼がひらめいた将にその時、そのひらめきは見事に的中した。

(やっぱり・・・上司との打ち合わせなんかじゃなかったんだ・・・
)

「ね、分かったかい」

「はい・・・」

視線の先の男は、やってきた女性と楽しそうに談笑している。明らかに「上司」などではない、軽装の女性。茶髪に薄い色のピアスをし、薄着の上着を着て、春物のスカートを穿いている。

「もしかして、浮気・・・」

「しっ！聞こえる」

そんな風に人差し指を口元に当てて制されると、まるで井戸端会議をしているおばさんの内の1人にでもなったような気になる。そんなことを思っただけで凹んでいると、会話が耳に入ってきた。

「ねえ、何時結婚してくれるの？」

（重・・・っ！）

いきなり会話が重い方向に進みだしたので、犬飼は思わず飲んでいったコーヒを噴出しそうになってしまった。ここで咽ると怪しまれるので、必死に咳き込むのを耐える。

「今、仕事が大変な時期なんだ・・・もう少し落ち着いてから・・・」

「仕事仕事って、いつもそればかりじゃない！本当は、私と結婚したくないんですよ・・・っ」

女性の方は何だかヒステリー持ちのようだ。今にも泣き出しそうにして俯いている。そんな女性に、男は何だか聞いてて恥ずかしくなるようなことを言った。

「そんなこと、あるわけないだろ？俺は、世界で一番君を愛しているよ・・・」

（さ、寒い・・・っ！）

おかしい。今は四季でいうと春のはずだし、しかもここは店内だから空気調整だつてきちんとされているはずなのに何だか寒い。

(・・・・・・)

犬飼は無性にこの場を離れたくなって須堂のほうを見た。須堂は顔色一つ変えずに若いカップルの成り行きを見守っている。

(この人すごいなあ・・・・)

また一つ変に須堂の尊敬するべきところを発見した、とどうでもいいと思いつながら感動する。何で自分はこんな所に居るんだろう、とまで想い始めたその時、

カタン

(あ・・・・)

若いカップル二人が立ち上がった。どうやら店から出て行くようだ。二人の表情を見る限り、破局になったわけではないらしい。

(・・・・・・)

男は会計を済ませ、女性を肩を抱きつつ店から出て行った。それを見送ると、須堂のほうから話しかけてきた。

「ね、嘘つきだったろう？」

「・・・・嘘つき、っていうより、あれは浮気では・・・・」

「浮気を快く受け入れてくれる人なんて、滅多にいないよ。だから、そのためには『嘘』が必要なんだ」

「そりゃ、確かにそうですけど・・・」

事実を言われただけなのに、何だかこじ付けのように聞こえる。理論的にものを考える人間と言うのは、皆こんな風な話し方をするのだろうか。

「・・・君は、嘘についてはいけないと思うかい？」

「・・・そりゃ、いけないと思います。人を騙すんだし・・・」

「・・・どうして、それがいけないと思う」

「え・・・」

人を騙すのはいけないに決まってるじゃないか、とは言えなかった。どうして、人を騙してはいけない？ 相手が傷付くから・・・？

「僕は、別に嘘をつくことは悪いことだとは思っていない。時には、嘘をつかないことで相手を傷つける場合だってある。例えばそれが『正義』と言えないとしても、そういう気遣いの仕方、僕はありだと思う。・・・ただ」

「ただ？」

須堂が変なところで言葉を切ったので、犬飼は聞き返した。

「それを、自分がきちんと背負えるかどうか、だ。相手を騙した分も含めて、『嘘』をついたことで変わってしまう、変わってしまった、事実をね」

「・・・事実・・・」

「未来と言った方が、解りやすいかもしれないね」

須堂はコーヒーを啜った。

「例えば、僕が君に嘘をつくでしょう。そうすると犬飼くん、君は僕に騙されるわけだ。そしてその騙した張本人は僕だから、『君を騙した』という事実を背負って生きていかなくてはならないんだよ」

「・・・」

難しくてよく解らない、という顔を犬飼がしたので、須堂は苦笑した。

「それでもし、相手を傷つけてしまったとしたら、僕はその責任を背負っていかなくてはならないんだよ。その言葉を紡いでしまったその瞬間から、死ぬまで」

ドクン

死ぬまで、と言った須堂の表情と声色が、普段とは全く別のものを感じた。今まで自分が出逢ったことのない、遠い代物。

犬飼は、自分の表情が強張っていることに気付かなかった。それに気付いた須堂は、もう一度苦笑してから、「帰ろうか」と言った。

「・・・あ！あの人たち・・・」

店から出たところで、先程のカップルを見つけた。反対側の道路のところで、もう一人女性を加えて、どうやら口論をしているようだ。

「浮気発覚、かな？」

須堂は楽しそうな顔をしている。

（悪趣味・・・）

「何か言ったかな？犬飼くん」

「いいえ、何でも・・・」

自称・人の心の声が聞こえる男、の前でうつかり本音を読み取られそうになった犬飼は、迂闊だったと後悔した。

「あれ、須堂先生？」

甲高い女性の声に振り向くと、そこには栗色の巻き毛の女性が立っていた。

「ああ、神崎先生。見回り中ですか？大変ですね」

「ええ、まあ・・・あら？あなたは・・・」

須堂の後ろに隠れていた、生徒らしき人物を発見した見回り教師は、首をかしげた。

「こんな所で、何をしているの？下校途中での飲食は禁止よ」

「え、あの・・・」

それは充分承知だったんだけど、今横にいる人物に無理矢理連れて行かれたんです、と言っても果たして信じてもらえるものかどうか。

「ああ、神崎先生。彼、犬飼くんは、僕の判断で喫茶店に入れたんです。何でも、どうしても相談したいことがあるって言うので、立ち話もなんだから、と・・・とても切羽詰った顔をしていたので」
え。

「あら、そうなんですか？・・・犬飼くん、そういうことは、先生の勤務時間内に言わないとダメよ？迷惑になってしまっわ」

おい。

「いえいえ、僕のことはいいんですよ。それより、犬飼くんも随分落ち着いたみたいなので、これから帰るところなんです。僕たちは、住んでいるところが近いようなので」

ちよつと。

「あら、それはそれは・・・じゃあ、よろしくお願いしますね。犬飼くん、またね」

「はあ・・・」

神崎先生、は何の疑いも持たなかったようで、栗色の巻き毛をきらきらと夕陽に煌かせ、それこそ天使のような笑顔で去っていった。

何を抜け抜けと言ってるんだあんた、という感情を思いつきり込めて須堂を見上げると、悪戯が成功した時のように笑っていた。

「言っただろ？嘘も方便って」

「・・・・・・・・」

「さ、帰ろうか」

呆れてものも言えないでいると、須堂が歩き出したので、何だか脱力感を覚えながらもその後が続く。途中、一度だけ振り返って見ると、二人の女性から同時に平手をお見舞いされている男の姿が見えた。

（自業自得ってやつか・・・）

肩を怒らせながら去っていく二人の女性の名前を叫んでいる男の背中を見て、犬飼は溜息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3627a/>

M e s s e n g e r

2010年10月28日08時55分発行